

フィールド レポーターだより!!



オオバナミズキンバイ(特定外来種)

2017年度 第1回調査

「カイツブリに会いに行こう」調査報告

今年の春から夏にかけて行ったカイツブリ調査の結果がまとまりました。県の鳥ということでみなさん関心が高く、くわしい観察記録が多く寄せられていて、とても興味深く読ませていただきました。また、全県を網羅した調査がされていて、河川やため池など、琵琶湖から離れた場所での貴重な調査結果が得られているのが特徴的です。

琵琶湖はかつて「鴉の湖(海)」と呼ばれ、多くのカイツブリが生息していたと言われます。毎年1月に行われるガンカモ類等生息調査を見ると、カイツブリは1980年代頃から減少し、その後は約500羽程度を前後しています。繁殖期については、琵琶湖岸のヨシ原を中心に断片的な調査があり、それによるとカイツブリは、面積880㎡以上のヨシ群落に生息するとなっています¹⁾。今回の調査結果でも、ヨシ帯の面積が500㎡以上の場所で多く観察されており、既存研究と近い結果となりました。一方、今回の調査結果で興味深かったのは、ヨシ帯や抽水植物帯のない場所で、垂れた樹枝等がある所に巣が作られていたことです。公園の池などで開水面にカイツブリが巣を作ることにはありますが、垂れた樹枝等との関係は、今後検証していく価値がありそうです。

県のレッドデータブックや他の地域の情報から、カイツブリの減少には、ヨシ原や抽水植物帯の減少、プレジャーボートの侵入、外来魚による餌生物の減少や直接の捕食などが関係していると考えられています^{2),3)}。以前と比べ、琵琶湖沿岸の環境はカイツブリにとってすみにくくなり、代わりに内陸部のため池や河川などが重要になっているように思われます。

色々面白いカイツブリの行動や生態が観察されていますが、まだまだわからないことも多いカイツブリです。今回は残念ながら見つけられなかった方も、ぜひまた来年、カイツブリに会いに行ってみませんか。新しい発見があるかもしれませんよ。

(担当学芸員 亀田 佳代子)

引用文献

- 1) 橋本啓史・須川恒(2006) 琵琶湖におけるヨシ群落環境と繁殖鳥類相の関係. 国際湿地再生シンポジウム2006—湿地の保全再生と賢明な利活用—報告書(滋賀県): 234-237.
- 2) 滋賀県生きもの総合調査委員会編(2016)「滋賀県で大切にすべき野生生物—滋賀県レッドデータブック2015年版—」サンライズ出版, 647pp.
- 3) 西野麻知子・秋山道雄・中島拓男編(2017)「琵琶湖岸からのメッセージ 保全・再生のための視点」サンライズ出版, 248pp.

「カイツブリに会いに行こう」調査報告

フィールドレポーター・スタッフ 前田雅子

カイツブリは滋賀県に住む人のほとんどが知っている鳥ですが、県のレッドデータブック 2015 年版では希少種になっており、生息数が少ないためにレポーターが見つけれないのではないかと、当初は心配しました。実際、何度も足を運んだけれども見つからなかったという人があったようです。幾度も調査に出かけてカイツブリを見つけてくださった人、山奥の池までわざわざ行ってくださった人を始め、調査に参加して下さった皆さま本当にありがとうございました。



カイツブリ（福岡敏雄さん撮影）

この調査から、琵琶湖周辺だけでなく内陸部の各地でカイツブリが見られ、繁殖をしていることがわかりました。また、ヨシ帯のない所で繁殖を可能にしている要因や、意外に人の近くにも棲んでいることがみえてきました。調査結果をご報告します。

I 調査の目的と方法

カイツブリ類(滋賀県では 5 種が確認されている)の冬の生息地や生息数については、滋賀県によってデータが蓄積されています。けれども夏の繁殖地については、これまであまり調べられていませんでした。そこで、カイツブリの繁殖地がどこにあって、そこにどれくらいの羽数があるかをレポーター調査の主目的としました。また、カイツブリがどのような環境で子育てしているかを調べて繁殖に影響する環境要因を探ること、その独特な行動や子育ての様子をレポーターが楽しみながら観察することも目的として、調査を行いました。

なお、滋賀県で繁殖するカイツブリ類は留鳥のカイツブリ(種)ですが、冬鳥のカムリカイツブリが稀に留まっていることがあるため、カイツブリの調査を主としつつ、カムリカイツブリも調査の対象にしました。またカイツブリ類を探しても見つからないことが予想されたので、生息環境の比較資料にするために、見つからなかった報告を積極的に送ってもらうようにしました。

調査方法は、まずフィールドレポーター・スタッフが調査票および調査資料を作成し、それを県内各地のレポーターに郵送しました。次にレポーターは、任意の場所で調査を行って調査票に記録した後、それを博物館に返送しました。調査期間は 2017 年 4 月～8 月末としました。

調査項目は 1.地点の位置 2.地点の環境(植物帯、人の活動状態) 3.カイツブリ類の生息の有無と羽数および巣の有無 4.観察された行動 5.そこで見られたカイツブリ類以外の鳥 6.カイツブリ類についての記憶や経験、以上の 6 項目の他に自由記述欄を設けました。

この調査では、レポーターが観察したカイツブリ類を写真撮影してそれを添付してもらうことが難しいため、同定(種の判定)は基本的に調査者の判断に任せることにしました。ただし、同定の際の判断理由を調査票に書いてもらい、スタッフがそれを見て、カイツブリと見誤りやすいオオバンやカワウではないことを確認した上で集計データとしました。カイツブリ類の子どもに関しては、体の大きさや羽の縦縞模様などで判断してもらいましたが、記入された調査票をみると、口ばしの色(オレンジ～黄色)を挙げたものが多くありました。

Ⅱ 調査の結果とまとめ

1. 報告件数とデータ数

23名のレポーターから381件の調査票が寄せられました。カイツブリ類が見られた報告が218件、見られなかった報告が163件でした。その中には、複数の調査者が偶然にも同一地点を調べた報告や、繁殖を確認するためにその地点を継続観察した際の複数報告が、非常に多くありました。そのため分布図および分布に関する考察では、2件以上の報告があった地点については生息や巣が見られた報告を優先し、生息数に違いがある場合は羽数が多かった報告を地点データとして集計に用いました。報告件数と地点数は次のようになります。

全報告件数 381件

見られた報告 : 218件 (147地点)

- ・カイツブリのみ————— 209件 (139地点)
- ・カイツブリとカンムリカイツブリ—— 7件 (6地点)
- ・カンムリカイツブリのみ————— 2件 (2地点)

見られなかった報告 : 163件 (139地点)

2. カイツブリ類の分布

◇カイツブリ

全調査地点を生息の有無のみで見ると、カイツブリは滋賀県内で湖岸周辺から内陸部まで広く分布していましたが、探しても見つからなかった地点が大津市坂本周辺から草津市矢橋にかけて連続的にあり、甲賀市では見つからなかった地点が局地的にまとまっていました(図1-1)。

調査地点の環境は琵琶湖50地点、内湖21地点、池沼167地点、ダム湖6地点、河川・水路39地点、その他3地点でした。環境ごとの分布図を図1-2～図1-7に示します。

- ・ **琵琶湖**……東岸部からの報告が少なかったのですが、南湖では分布しなかった地点が多く(確認地点8、未確認地点21)、高島市から長浜市北部にかけては分布した地点が多く(確認地点19、未確認地点3)ありました(図1-2)。琵琶湖の湖岸という一つの 카테고리の中で、場所による分布の違いがみられました。
- ・ **内湖**……21地点中の19地点に分布し、各地で成鳥が見られましたが、県南部では子どもが見られた地点が少ない特徴がありました(図1-3)。
- ・ **池沼**……今回の調査で最もよく調べられた場所です。167地点中65地点で分布しました。内湖に比べると分布する割合が低いですが、生息地点の半数で繁殖が見られ、池沼は内陸部で主な生息地になっていることが推察されました(図1-4)。ただし、高島市では分布が11地点中3地点で、分布しなかった地点が多くありました。
- ・ **ダム湖**……調査地は6地点で、そのうちの1地点(日野ダム)のみに分布しました(図1-5)。
- ・ **河川・水路**……河口部や平野の緩やかな流れの所に分布地点が多くありました(図1-6)。内陸部では頭首工によって堰き止められた小さい水域に分布する特徴がありました。
- ・ **その他**……余呉湖と彦根城の堀には分布せず、造成地の湿地で見られました(図1-7)。

- 見られた N=145
- ×見られなかった N=141

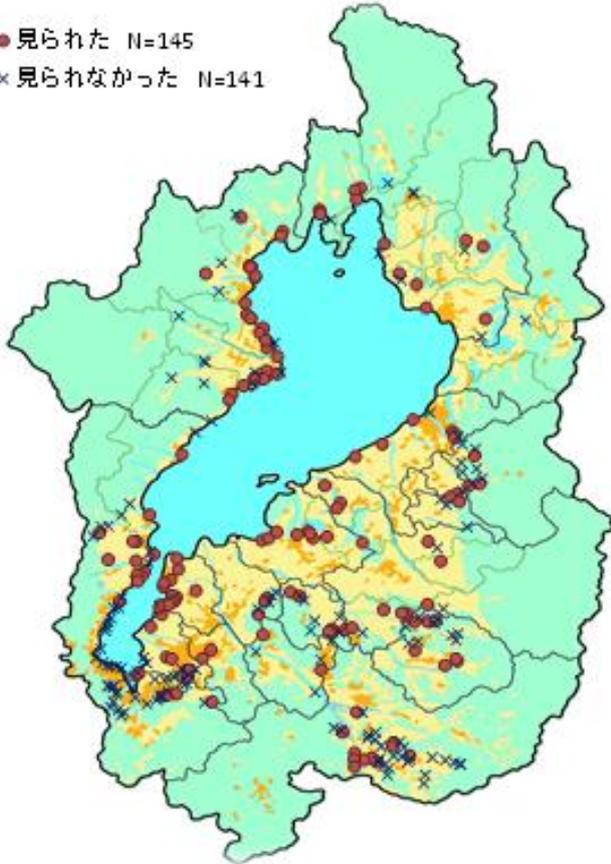


図 1-1 カイツブリの分布 全地点の生息の有無

- ×いない(24)
- 成鳥のみ(15)
- ◆親子(11)

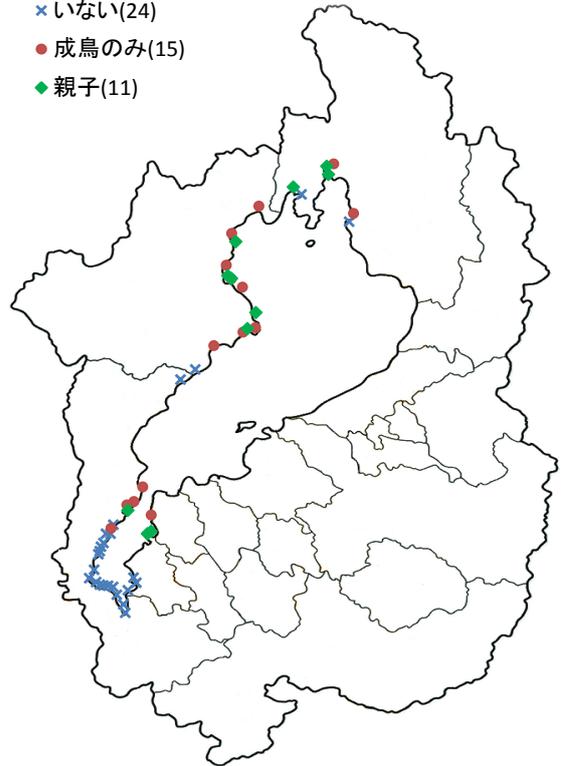


図 1-2 カイツブリの分布 琵琶湖

- ×いない(2)
- 成鳥のみ(10)
- ▲成鳥&巣(2)
- ◆親子(7)

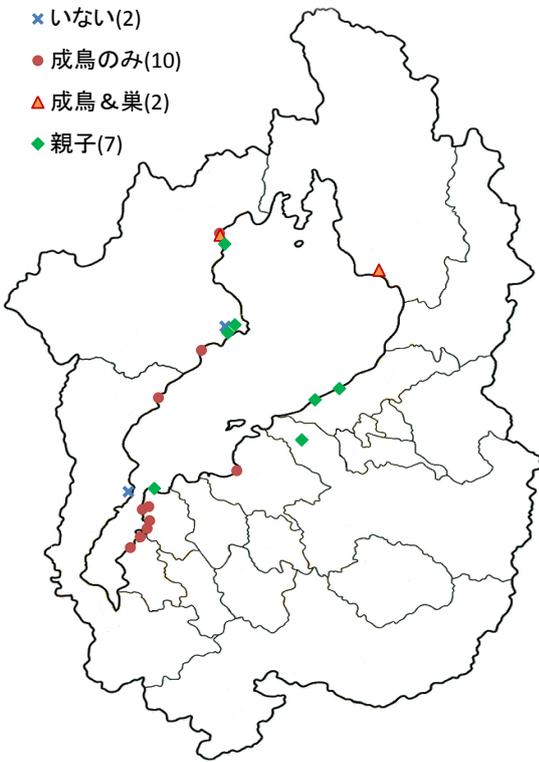


図 1-3 カイツブリの分布 内湖

- ×いない(102)
- 成鳥のみ(26)
- ▲成鳥&巣(4)
- ◆親子(33)
- 子どものみ(2)

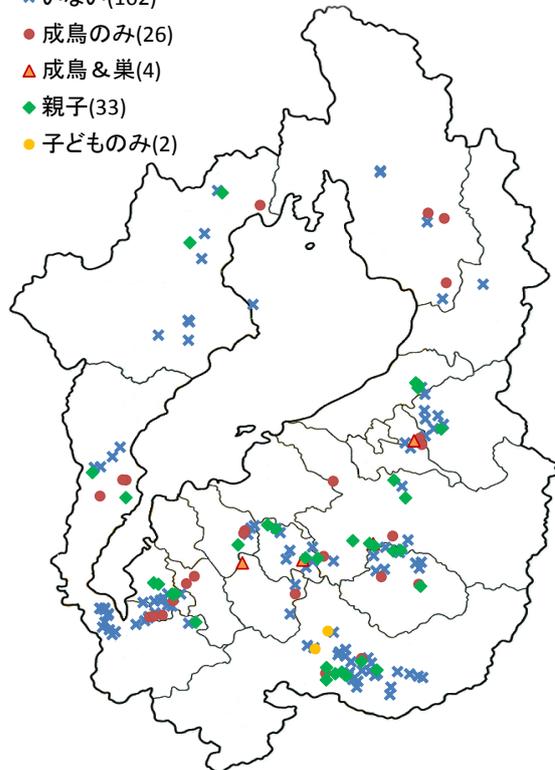


図 1-4 カイツブリの分布 池沼

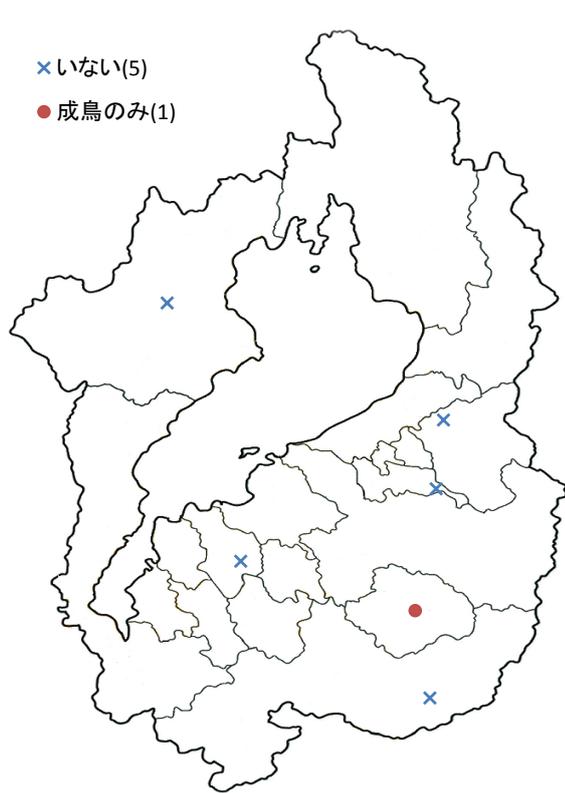


図 1-5 カイツブリの分布 ダム湖

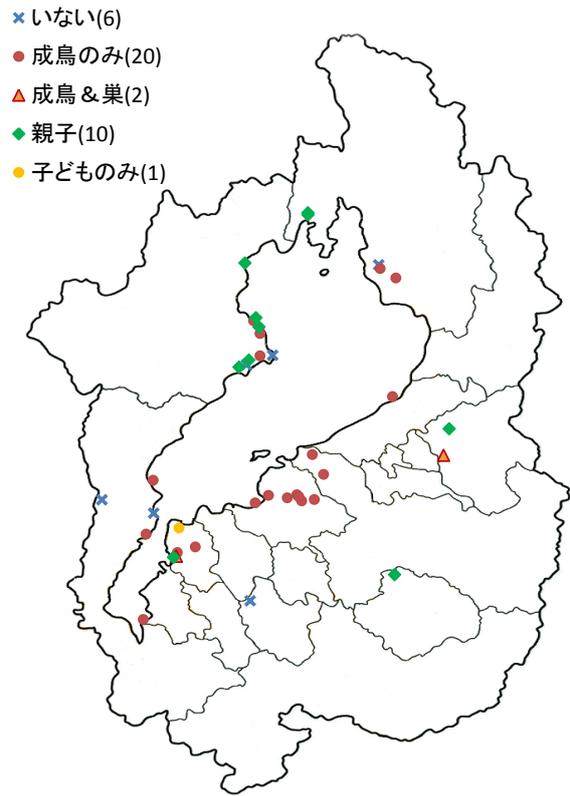


図 1-6 カイツブリの分布 河川・水路

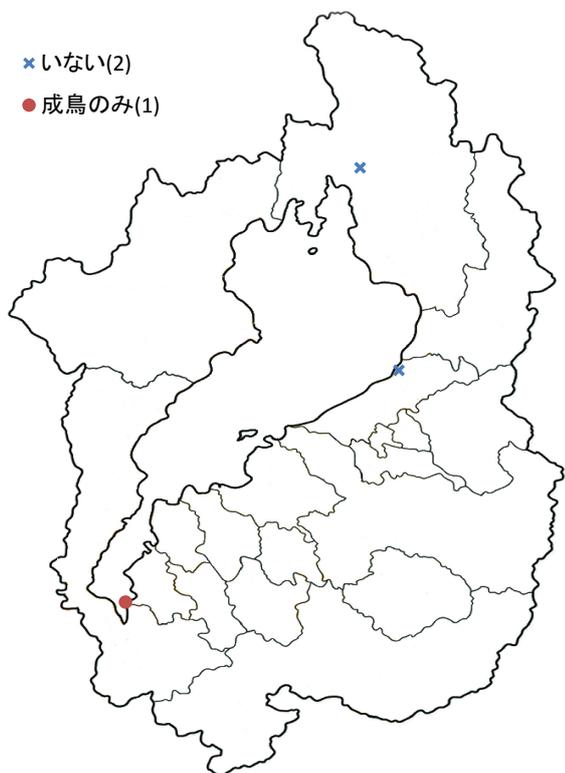


図 1-7 カイツブリの分布 その他

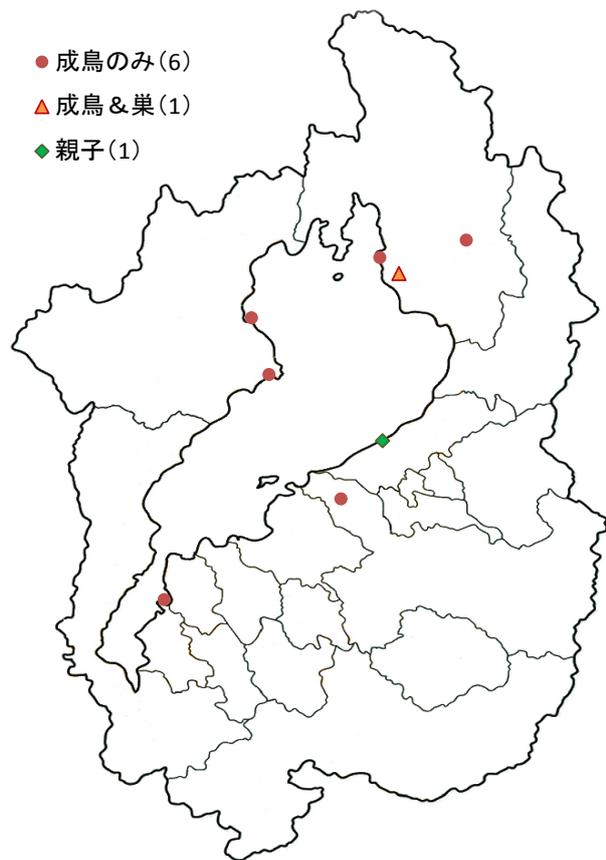


図 1-8 カンムリカイツブリの分布

次に、市町村別の調査地点数、生息地点数とその羽数を表 1 に示します。カイツブリの生息や生活圏は行政区に左右されることはありませんが、調査地点数が多かった市町について比べると、生息地点数や確認羽数が多いのは高島市と長浜市、少ないのは大津市と甲賀市といえるでしょう。大津市に接する草津市では意外に多く分布していました。

生息地点の環境別内訳

市町	調査地点数	生息地点数 (生息した割合)	確認羽数		琵琶湖			内湖			池沼			ダム湖			河川水路			その他		
			成鳥	子ども	生息地点	成鳥	子ども	生息地点	成鳥	子ども	生息地点	成鳥	子ども	生息地点	成鳥	子ども	生息地点	成鳥	子ども	生息地点	成鳥	子ども
大津市	59	16 (27%)	35	10	5	16	1	1	2	0	8	12	9				2	5	0			
草津市	23	12 (52%)	30	23	2	7	7	2	4	0	6	16	16				1	1	0	1	2	0
栗東市	2	2 (100%)	3	0							2	3	0									
守山市	11	11 (100%)	18	5	1	1	0	5	11	3							5	6	2			
野洲市	7	3 (43%)	5	3							3	5	3									
近江八幡市	9	9 (100%)	20	0				1	1	0	1	1	0				7	18	0			
湖南市	5	2 (40%)	5	0							2	5	0									
甲賀市	37	11 (30%)	24	31							11	24	31									
竜王町	13	6 (46%)	15	17							6	15	17									
日野町	17	8 (47%)	26	9							6	14	5	1	7	0	1	5	4			
東近江市	13	10 (77%)	30	8				1	12	2	7	14	6				2	4	0			
愛荘町	3	0 (0%)	0	0																		
甲良町	4	3 (75%)	5	0							3	5	0									
多賀町	9	3 (33%)	6	7							1	1	3				2	5	4			
彦根市	9	6 (67%)	14	13				2	6	4	3	6	9				1	2	0			
米原市	1	0 (0%)	0	0																		
長浜市	21	13 (62%)	34	10	5	17	7	1	4	0	3	5	0				4	8	3			
高島市	43	30 (70%)	111	49	13	51	25	6	29	12	3	5	2				8	26	10			
合計	286	145	381	185	26	92	40	19	69	21	65	131	101	1	7	0	33	80	23	1	2	0

表 1 市町村別の調査地点数およびカイツブリの生息羽数

この調査ではカイツブリの成鳥が 145 地点で 381 羽、子どもが 64 地点で 185 羽確認されました。カイツブリは泳いだり飛んだりして水域間を移動できるため、異なる調査日に別の場所でその個体を観察するという、いわゆるダブルカウントが生じている可能性があります。けれども個々のつがいが繁殖期に入って生活場所が決まると以後の移動は少なくなりますので、それほど大きな差は生じていないと思われます。2017 年 1 月に行われた「ガンカモ類等鳥類生息調査」でカイツブリが 488 羽計数された(日本野鳥の会滋賀会報第 48 巻)ことを考慮すると、レポーター調査は精力的に調べられており、その結果は滋賀県の生息状況を反映していると考えられます。

調査結果から、カイツブリは夏の繁殖時期に琵琶湖周辺だけでなく、池沼を中心として内陸にも広く分布することが分かりました。ただし、大津市の市街地周辺では見つけるのに苦労するほど生息地、生息数ともに少ないようです。高島市では、内陸部にある観察可能な池(施錠された池や自衛隊の演習地以外)の大多数が調べられましたがカイツブリの生息地点は少なく、分布は湖岸周辺に集中していました。この他、南湖の湖岸周辺で子どもの確認が少なかったこと、草津市の市街地に残る池で生息および繁殖が多く見られたことを興味深く思います。

◇カムリカイツブリの分布

カムリカイツブリの生息報告は 8 地点(9 件)あり、環境別では琵琶湖 4 地点、内湖 2 地点、河川水路 1 地点、池沼 1 地点でした(図 1-8)。分布地点は県北部に多くありましたが、繁殖は長浜市の河川で産卵されている巣、彦根市の曾根沼で子ども 2 羽が確認されました。カムリカイツブリは冬鳥ですが、ごく少数が夏期も滋賀県に残り、一部は繁殖していることが分かりました。

3. 繁殖 — 繁殖時期と子どもの数、子育て —

「分布」についての検討は“地点”で捉えたデータを用いましたが、以下の「繁殖」「生息環境」「行動」については調査日との関連が予想されるため、個々の調査票すなわち“件数”で集計および検討をします。

全報告 381 件の中でカイツブリ類が見られた報告は 218 件あり、そのうち子どもは 77 件で観察されました。最も早い子どもの確認日は 5 月 8 日で、場所は竜王町にある工場の池でした。



親の背中に乗るヒナ
(井野勝行さん撮影)

カイツブリ類が見られた報告を 10 日ごとの観察日に区切り、子どもの確認件数の経時変化を図 2 に示します。5 月は、カイツブリ類が生息した 62 件の中で、子どもの確認は初旬と中旬にそれぞれ 1 件と 2 件のみでした。けれども 6 月以降は、生息地点のおよそ半数で子どもが観察され、各地で子どもが見られるようになりました。8 月に子どもの確認件数が一旦減少していますが、調査票に「8 月初旬の台風で巣が流されたようだ」「巣が崩壊していた」という記述があり、8 月下旬には子どもの確認件数、羽数ともに増加していることから、子どもの誕生は調査期間終了の 8 月末以降も継続した可能性があります。

このように子どもの確認件数は季節の進行に伴って変化しましたが、一つの地点で観察される子どもの羽数は季節による変化がみられませんでした。1 家族に見られた子どもの数の最高値は 6 羽でしたが、1 羽から 3 羽が中心でした。同じく、1 地点での最高値は高島市の琵琶湖沖で 14 羽(成鳥は 9 羽)、子どもが見られた全地点の平均は 2.7 羽でした。

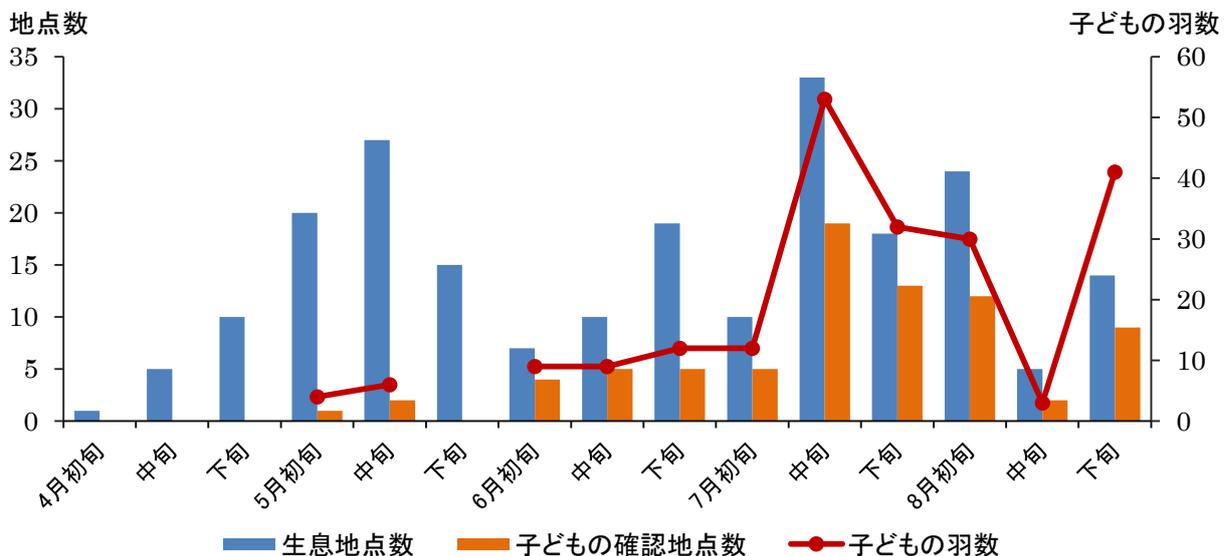


図 2 生息地点における子どもの確認地点数と羽数の変化

カイツブリの繁殖期間については、「日本動物大百科 鳥類」(1996 平凡社)で 5 月下旬頃～晩秋、「日本の野鳥」(1985 山と溪谷社)で 4 月～9 月と記載されています。また、産卵から孵化までの抱卵期間は 20～25 日くらい(「日本動物大百科」1996 平凡社)だそうです。この調査では 5 月初旬に子どもが初見されたので、早いものは 4 月早々に巣を造り始め、4 月中旬には

産卵していたと推定されます。抽水植物の新しい茎・葉が繁ってくるのは5月以降ですが、カイツブリ類の繁殖はそれよりも前に始まっているようです。繁殖の終了時期についてはこの調査からは分かりませんが、繁殖が終わって冬羽に換わるのを観察できなかったことが少し残念です。

◇カイツブリ(種)の繁殖と子育て

カイツブリの繁殖に関する観察記録をたくさん寄せていただきました。レポーターの記録を用いてその進行を紹介します。

A. 縄張りの形成と防衛

成鳥3羽が見られたが、その中の1羽が、近づいてきた1羽に対して追い払いをした。普通は鳴いて追い立てるが、この時は助走はばたきをしながら10mほど攻め寄り、これを3度繰り返した。この剣幕に負けて、侵入した1羽は引き下がり、そのつがいと共に別の場所に移動した。

B. 巣作り

1羽が巣を作っている最中で、オオカナダモのような水草を長さ20cmくらいくわえて戻り、岸から垂れ下がるクズにそれをひっかけていた。この個体は繰り返し何度も巣材を運んでいたが、つがいの相手は近くで見ているだけだった。

C. 産卵後の抱卵

ヒメガマが群生するところに巣があって、1羽が巣の上に、もう1羽が近くに隠れていた。観察者に気づくと、巣にいた親は巣材の一部を抜いて卵の上に被せ、ヒメガマ群の中に入って身を隠した。

D. 孵化後の子育て

・ 親鳥1羽が子どもを4羽連れて泳いでいた。一番小さいヒナは親の背中に乗り、1羽は羽根の下に入り、他の2羽は親の近くを自力で泳いでいた。目的の場所につくと、背中に乗っていたヒナは降りて泳ぎ始めた。親は周囲の安全を確かめるように常にキョロキョロと見回していた。

・ 子ども達はまだそれほど大きくなく、親が潜って再浮上した場所に急いで行って、餌をもらおうとした(早いもの勝ちのシステム)。だが、潜る回数に対して給餌回数はその半分くらいで、餌が少ないようだった。

E. 巣立ち

前回見られた2羽の子どもが今日はどこにも見当たらない。前の観察時にすでに親から離れて行動していたので、巣立ちをして別の場所に行ったのかもしれない。

4. カイツブリの生息に影響するもの

◇ヨシ帯 — ヨシ帯の大きさはやはり重要 —

カイツブリの生息数の減少理由の一つに、営巣場所であるヨシ帯(ヨシを含む抽水植物群落)の減少が指摘されています(「滋賀県で大切にすべき野生生物 2015 年版」など)。そのため、調査項目として抽水植物群の有無、植物の種類とその大きさを設定し、植物帯の大きさは目測で大まかな長さと幅を記録してもらいました。なお、カイツブリ類は水に浸かっている植物帯を利用しますので、この項目では株元が水に浸かっている抽水植物群を対象にしました。

調査の結果、観察地点に抽水植物が見られなかったのは 137 件でした。抽水植物が見られた 236 件では、複数回答でヨシ 209 件、ガマ 30 件、マコモ 29 件、ハス 11 件、その他の種が 17 件ありました。

調査地点のヨシ帯の大きさが記入されていた 373 件について、カイツブリ類の生息の有無を対応させると、ヨシ帯の面積が小さいほど生息する割合が低くなりました(図 3)。ヨシ帯の面積が 1000~m²と 5000~m²の区分でカイツブリ類の生息割合が多少下がっているのは、その区分のサンプル地点数が少ないためと、大きなヨシ帯ではヨシの中に隠れたカイツブリ類を探しにくいいためかもしれません。とはいえ、これまでの知見と同様に、ヨシ帯の大きさはカイツブリ類の繁殖期の生息に影響しているといえるでしょう。ヨシは巢材として利用でき、浮巢をひっかけて固定する場所になると同時に、ヨシが繁ると捕食者に見つかりにくくなる利点があると思われます。

けれども、ヨシ帯がない(0 m²)地点の 4 割弱にカイツブリが生息し、さらにそのうちの約半数で子どもが見られたのはなぜでしょう。この疑問の解答は巣が見られた場所にヒントがありました。

◇巣が見られた場所 — 垂れた樹枝の下 —

カイツブリ類の巣は 31 件で観察されました(図 4)。ヨシ群とヨシ以外の抽水植物帯では、それぞれ 5 件と 4 件の計 9 件で巣が見られました。しかし、最も多く見られたのは「垂れた樹枝の下」の 10 件で、「岸から垂れた草」にひっかけた巣も 3 件ありました。さらに、開水面に繁茂した「ヒシの上」が 6 件、全くの「開水面」(「差し出された竹の先」を含む)が 3 件でした。

ヨシ帯の裏(陸地側)からカイツブリ類の巣を見つけるのは容易でないために、ヨシ帯での確認件数が少なかったことが考えられます。けれども、垂れた樹枝の下だけでなく、クズの蔓の

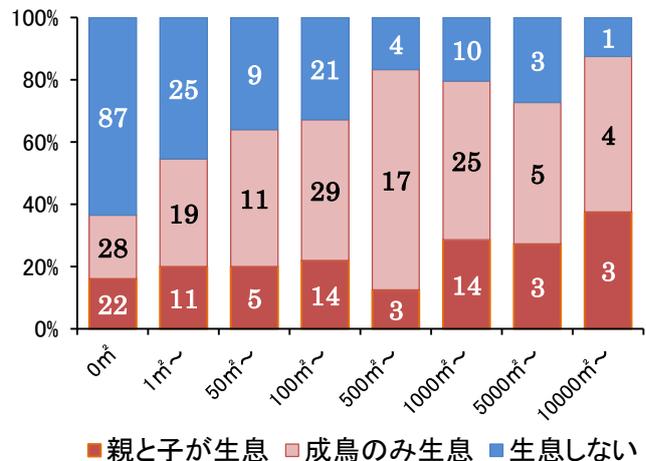


図 3 ヨシ帯の大きさとカイツブリ類の生息の有無

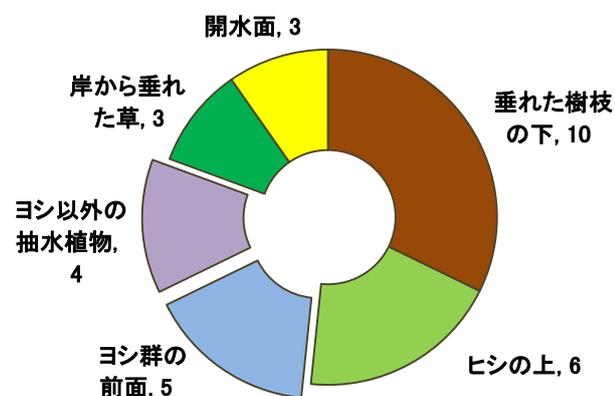
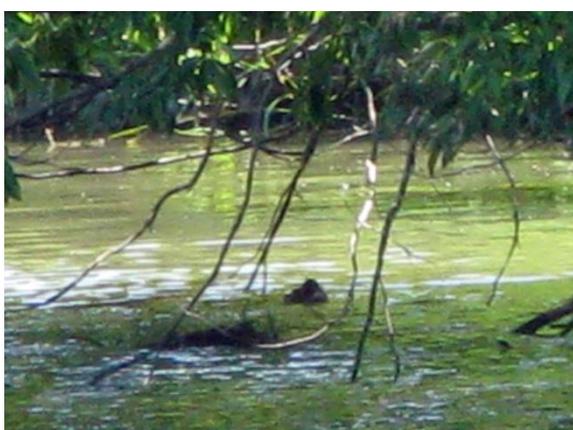


図 4 巣が見られた場所

ような頼りないものに固定された巣で子どもが確認されており、カイツブリ類はヨシ帯以外の場所を積極的に利用していることが推察されました。カイツブリ類は造巣場所として、抱卵期や子どもがある程度大きくなるまでの時期を安全に過ごせる所を選んでいるはずで、ヨシ帯の減少によって、それ以外の場所に造巣の適地を見出し、利用しているのかもしれませんが。

ヨシが生育していない地点の報告で、自由記述欄に垂れた樹枝や草の有無が記録されていたものが100件ありました。垂れた樹枝等が「ある」場合と「ない」場合のカイツブリ類生息の有無について、亀田佳代子学芸員がカイニ乗検定を用いて統計解析されたところ有意差が認められ($p < 0.001$)、垂れた樹枝や草のあるところにはカイツブリ類が有意に生息しているという結果が得られました(図5)。樹枝の下の空間が休息場所や隠れ場所として成鳥の生活拠点になっている様子が調査票の記録にも書かれており、垂れた樹枝等が営巣場所に使われるだけでなく、成鳥の夏の生息場所に関係していることがわかりました。



垂れた樹枝の下に造られた巣
写真中央に親が1羽。その手前の枯れ枝に巣が固定され、子どもが1羽確認された。

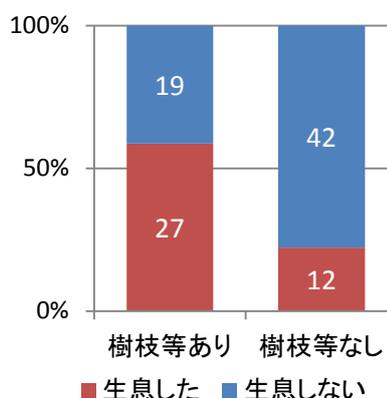


図5 抽水植物がない地点における垂れた樹枝や草の影響

レポーターの記述より

・よい機会なので、できればカイツブリの巣も見つきたいと、同じ調査場所に何度も足を運び双眼鏡を使用したり、長ぐつで水の中に入ったりして探してみたが、結局のところ、巣のありそうな場所にはボートでもないとなかなか近づけないし、ヨシ等が繁茂して、双眼鏡でもその中まで見通せないことにより、残念ながら巣は見つけることができなかった。

・池には1m×20mのマコモ群が3箇所あるが、造巣場所として、マコモ群よりも樹枝の下を選択していた。(部分)

◇人間活動 — 繁殖・子育てを邪魔する人の行為は? —

カイツブリ(種)は警戒心が強く、20~30m以上離れていても人を嫌って遠ざかります。カイツブリ類の繁殖期は人が水辺に近づくことが多い時期ですので、水辺で代表的な人間活動として「近くに漁船」「レジャーボート」「釣り」「人通り」「車通り」「人の姿」「その他」を設定し、それにチェックを入れてもらう方法で繁殖に影響しそうな人間活動をさぐりました。なお、「その他」を選んだ回答の中に「集落の外れ」「住宅地に接する」のような記載が多数ありましたので、これを「住宅地に隣

接」として新たに項目を設けました。同様に、「公園化された場所」の項目も新設しました。集計結果を図 6 に示します。

「釣り人」「人通り」「車通り」「人の姿」「住居地に隣接」の項目では、その有無によってカイツブリ類の生息割合に違いはみられませんでした(図 6-3、6-4、6-5、6-6、6-7)。カイツブリ類が頻繁な車の通行を警戒しないことは想像がつきますが、住宅地に隣接して人通りが頻繁であっても生息に差がないという結果は、興味深く思います。

一方、「近くに漁船」「レジャーボート」「公園化」では、明確な差とはいえませんが、生息の有無に微妙な違いがありました。カイツブリ類は「近くに漁船」が見られる場所にやや多く(図 6-1)、「レジャーボート」が見られる場所にやや少ない(図 6-2)という傾向がみられました。これは、漁船は定期的な運航(発着の時刻や航路)をしますが、レジャーボートは不測的な運航でカイツブリ類のいるヨシ帯にも近寄ることがあることと関係するのかもしれません。また、そこで見られる船の数や運航頻度も関係するのではないかと思います。「公園化」された池や浜辺にカイツブリ類がやや多く生息した(図 6-8)ことについては、ヨシ帯を保全するために公園化された湖岸や、公園化したけれども人の通行はあまりないという池もあり、理由の説明が難しいところです。

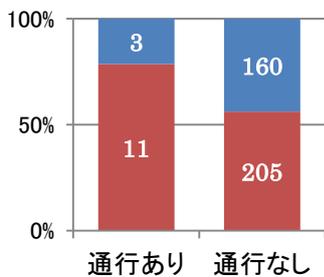


図 6-1 漁船

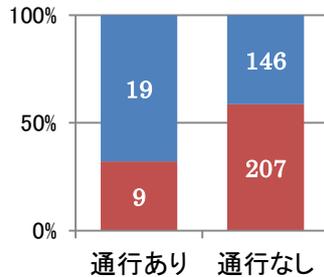


図 6-2 レジャーボート

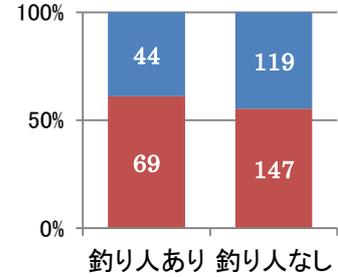


図 6-3 釣り人

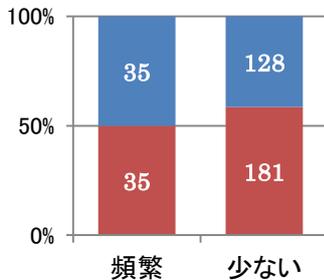


図 6-4 人通り

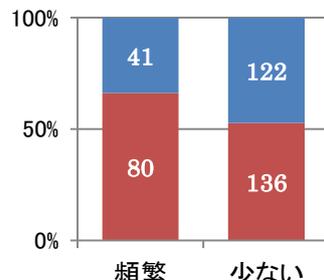


図 6-5 車通り

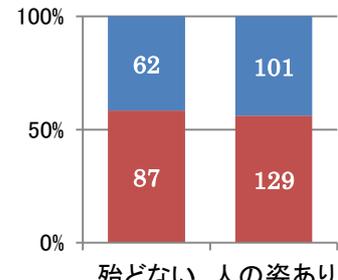


図 6-6 人の姿

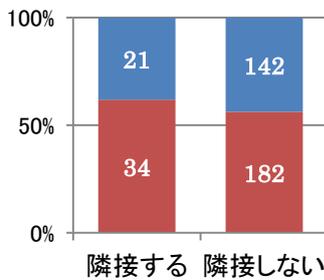


図 6-7 住宅地に隣接

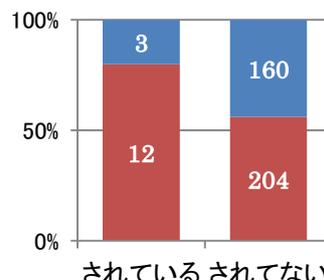


図 6-8 公園化

凡例
■ 生息しない
■ 生息した

図 6 カイツブリ生息に影響する人間活動

カイツブリ類の警戒心に関連する行動記録が調査票に多数ありましたのでここで紹介し、生息に対する人間の影響を考えてみたいと思います。

まず、人に対する強い警戒心に触れた記述は「水面に浸ったヤナギの木の中に、身をひそめていたが、人の気配でさらに奥の方へ隠れ、姿を消した。」「巣で抱卵していたが、私を警戒して巣の周りを潜らずに泳いでいたため、画像を撮れました。(写真下)」など、31件ありました。一方、「川幅が5m位で狭いが、カイツブリは観察者に対してあわてて逃げることはなく、ゆっくり遠のいていくぐらいで、人をあまり警戒しない様子だった。」のような、警戒心の緩さを指摘した記述は12件ありました。「(湖岸近くにいたつがいは)観察者が近くにいても、警戒している様子は見受けられなかった。水路にいた1羽は警戒心が強く、観察者に気づいてからは警戒音を発し、どんどん距離をとるような行動になった。」のように、ごく近い場所においても個体によって警戒心に差があることが推察される報告もありました。

カイツブリ(種)は本来、人に対する警戒心が強い鳥だと思われます。この調査の結果から、カイツブリには「人見知り強いタイプ」と「わりあい人に慣れたタイプ」の2タイプがあることが見えてきました。人の近くで生息するカイツブリは、人の各種の行為が自分に利害を及ぼすものかどうかを学習するのではないのでしょうか。「釣り人の竿先から10mほどのところに近づき、そこで潜って採餌をした。釣り針付近に魚がいることを承知して、意図的に近づいているように見えた。」という報告からは、カイツブリが人を利用している様子が伝わってきました。「人が居ることでビ、カラスから守られるので(人の)近くで子育て。」という報告もありました。カイツブリの卵や子どもを捕食する動物としては猛禽類などの鳥類、ブラックバスなどの魚類、ヘビ類などが考えられますが、捕食者との攻防や捕食されたという観察記録は今回の調査の中にはありませんでした。



カムムリカイツブリのつがいと巣 (土田正文さん撮影)

5. 観察されたカイツブリの行動

繁殖時期のカイツブリ類の行動は、観ていて飽きません。行動観察を楽しんでもらうとともに、カイツブリ類が何をしていたかを「主な行動」と「その他の行動」に区分して、複数回答で書き入れてもらいました。

カイツブリ類が見られた218件のうち最も多く観察されたのは「水面を泳ぐ」で、「潜る」「鳴く」がそれに続きました(図7)。けれども主な行動では「潜る(84件)」「泳ぐ(62件)」「水面でじっとしている(31件)」の順で、潜る行動が最も多く挙がりました。カイツブリにとって泳ぐことは基本の行動であり、目的を持った行動としては潜る(採餌する)姿がよく見られたのでしょう。「その他」の行動では、ヨシ帯に入ってじっとしている(9件)、羽繕い(6件)、造巢中(5件)、抱卵中(5件)、水面を羽ばたきながら走る(4件)、潜って逃げた(4件)などがありました。

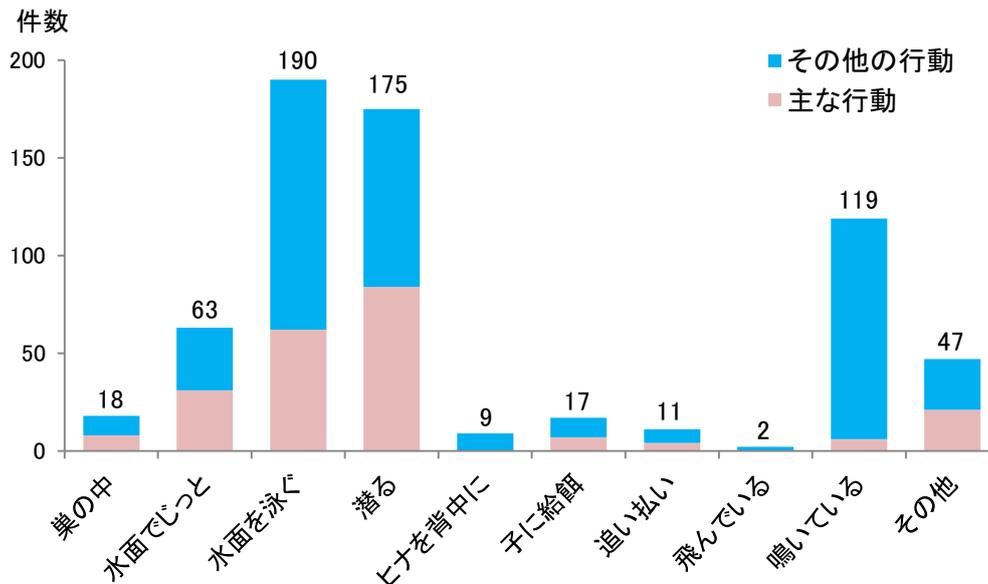


図7 生息地点で観察された行動

◇トレードマークの潜水・採餌

亀田佳代子学芸員によれば、カイツブリ類は採餌をする以外にも、危険を回避したり水中の様子を見たりするために、水に潜ることがあるそうです。

潜水時間の計測では112件の回答がありました。観察中にカイツブリ類が何度も潜るからだと思いますが、「平均〇秒くらい」「〇秒～〇秒」「最長〇秒」といった多様な表記がされていました。そのため、正確な集計結果を示すことが難しいのですが、大まかには以下のような状況でした。

まずカイツブリの成鳥の潜水時間は、10秒くらいまでが33件、10～20秒くらいが40件、20秒以上は14件で、10秒前後(5～15秒)が多いようでした。潜水時間は最長25秒ほどとする記載(「日本の野鳥」1985)があります。調査票には1分以上潜水したという記録もありましたが、一度浮上した後またすぐに潜る場合があるので、調査者が一度目の浮上先を見逃したのかもしれない。

カイツブリの子どもについては23件の記録がありました。「小さい子どもは3～6秒、大きい子どもは10～15秒」のように、潜水時間は成長度合いに関係することが記されていました。

カムリカイツブリは2件(10秒、20～30秒)の記録のみでした。カムリカイツブリはカイツブリよりも多少長く潜水するそうです。

その場所にエサが豊富にあって、その個体の捕獲技術が高い場合は、1回の潜水時間が短くなると思われます。潜水時間の記録から何か特別なことが分かるものではありませんが、観察する中でレポーターにとっての新発見・再発見があったようです。「魚をくわえて浮上した」が6件、「オタマジャクシをくわえていた」が1件の他、「潜っても空振りばかり。何もくわえずに再浮上した。」という記録もありました。食べていたものについては、「水面上を群舞する羽虫を追いかけて捕食していた」のが観察されました。

◇鳴き声

カイツブリ(種)はよく通る高い声で鳴きます。行動観察記録では119件で鳴き声が聞かれています。この声を聞けば姿が見えなくても近くにカイツブリのいることが一目瞭然ならぬ一聴瞭然

です。調査地で聞いた鳴き声を文字に置き換える設問では、カンムリカイツブリの声を含めて 22 件の回答がありました。それらを表 2 に示します。

さえずり(主に繁殖期に、つがいの形成や縄張りを主張する際の鳴き声)では、レポーターの工夫が感じられるさまざまな表記がありました。みなさんはこの内のどれに共感されるでしょうか。一方、地鳴き(さえずり以外で威嚇、警戒、コミュニケーションとして発する鳴き声)では、カイツブリを観察する中で鳴き声を解釈し、その音(ことば)の意味を添えて記録がされていました。驚いた時や警戒を促す時に発する「ピッ!」という短く鋭い声、抗争時の威嚇音、つがいの相手に発した挨拶です。カイツブリが声を使い分けていることが表れていました。

カンムリカイツブリの鳴き声は 1 件だけでしたが、「グアー」と大きな声で鳴いたそうです。

カイツブリ
さえずり ・キュルルルルルー ・ヒュルルルルル… ・ひゆるるるるー ・ツェケケケケケエー ・ヒヨロロロロ… ・キューコロコロコロ ・ケケケケケー ・ケケケケ… ・ヒヒヒヒ… ・キキキキ… ・リリリリ…… ・ケレケレー ・ケレケレケレと甲高い声 ・キリキリキリ
地鳴き ・ヘニャ! (「ただいま」の挨拶として) ・ピッ(警戒音) ・ピッという甲高い声 ・キヤー、キヤー、キヤー (侵入者と戦うとき)
子どもの鳴き声 ・フィヨフィヨフィヨ (子どもの声:親を呼ぶような感じ) ・ピッ、ピッ… (子ども) ・ピピピピピピピピ… (大きくなった子どもが 16 ビートのリズムで)
カンムリカイツブリ
・グアー

表 2 カイツブリ類の鳴き声

6. 調査地点で見られたカイツブリ類以外の鳥

観察地点の水辺に見られたカイツブリ類以外の鳥について、その有無と種類、そしてどのような様子であったかを記録してもらいました。結果を表 3 に示します。

381 件のうち「見られなかった」地点が 163 件(43%)ありました。見られた鳥の種類を複数回答で挙げてもらうと、最も多かったのはカルガモ 84 件(22%)、次いでオオバン 62 件(16%)、アオサギ 61 件(16%)、カワウとオオヨシキリ各 55 件(14%)の順でした。少なかったのはアマサギ 1 件、カワセミ 2 件、そしてバン 10 件でしたが、白いサギ(コサギ、チュウサギ、ダイサギ)の 36 件は予想よりも少なかったように思います。「その他」は各種のカモ類が中心でしたが、4 月に大津市北部の湖岸でハジロカイツブリ、7 月に多賀町の河川でオシドリが各 1 件ありました。陸上の鳥のキジが水際で見られた報告も 1 件ありました。

月別でみると、4 月と 5 月はオオバン、7 月と 8 月はカルガモが多く見られたことがわかります。アオサギとカワウは調査期間内の変化があまりなく、オオヨシキリは 5 月に多く確認されました。

	調査票 件数	見られ ない	カル ガモ	白 い サ ギ	ア マ サ ギ	ア オ サ ギ	バ ン	オ オ バ ン	カ ワ ウ	ヨ オ シ オ キ リ	カ ワ セ ミ	そ の 他
4月	30	9 (30%)	5 (17%)	2 (7%)	0 (0%)	7 (23%)	2 (7%)	17 (57%)	6 (20%)	5 (17%)	1 (3%)	13 (43%)
5月	115	40 (35%)	19 (17%)	9 (8%)	0 (0%)	20 (17%)	5 (4%)	35 (30%)	11 (10%)	34 (30%)	0 (0%)	12 (10%)
6月	76	40 (53%)	12 (16%)	7 (9%)	0 (0%)	9 (12%)	0 (0%)	7 (9%)	10 (13%)	13 (17%)	0 (0%)	8 (11%)
7月	100	47 (47%)	31 (31%)	6 (6%)	0 (0%)	16 (16%)	1 (1%)	2 (2%)	19 (19%)	3 (3%)	1 (1%)	3 (3%)
8月	60	27 (45%)	17 (28%)	12 (20%)	1 (2%)	9 (15%)	2 (3%)	1 (2%)	9 (15%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (7%)
合計	381	163	84	36	1	61	10	62	55	55	2	40

()内は月別の調査票件数に対するその種の確認割合

表3 カイツブリ類以外の鳥の有無と種類

冬鳥のオオバンは5月末頃までにはほとんどが北の繁殖地に移動し、夏になると留鳥のカルガモが水域で目立ったようです。オオヨシキリは「ギョギョシ」という独特な声で確認されるからでしょうか、鳴き声が際立つ5月から6月にかけて多く報告されました。

レポーターの記述より

- ・ カモ:水面を泳いでいた。カワウ:黒い鳥が5つくらい巣を作っていた。巣には幼鳥3羽くらいがいて、近くに成鳥がとまっていた。
- ・ 白いサギ…木の枝にとまり水面を見ている(餌を探していると思う)。
- ・ カルガモは警戒心が強く、人の姿を見るとすぐに飛んで逃げます。一方、オオバンは何事もないように、水面をつついて採食しています。

7. カイツブリ類についての記憶や経験

回答件数は少なかったのですが多様な記載がありました。「今回初めて身近に見た」「(カイツブリは)博物館などの施設で見たことがある」という記述がありました。写真を撮るためによく野外観察をする人が「琵琶湖や草津川でもときどき見かけるが、生息数は少ないと思われる～」と記入されており、カイツブリが身近で見られなくなっていることが改めて浮き彫りになりました。

一方で、「今年は見られないが、長浜市池奥町の西池で、常に見られた」「毎年、家の近くの池(田堵野新池)で1ペアが営巣してひなとっしょにいるのを見るが、～」という報告があり、地域によって分布に違いがあることがわかります。

昔と比較したものもありました。「湖岸道路でヨシがある所に昔は多く見られたが、最近数が少ないようです。」「20年くらい前、大津市柳が崎の県営ハーバーでは、停泊中の艇の脇で採餌・遊泳をしているのが常態であり鳴き声も絶えず聞いていた。しかし近年では見かける数も少なく～」と記述され、昔を知る人はカイツブリの生息数の減少を実感されたのではないのでしょうか。「～川で、子どもの頃は魚とりや魚釣りをしたものです。当てもカイツブリは居たのですが、全く記憶にありません。」という記述には妙に納得してしまいました。

おわりに

滋賀県に 500 羽ほどしかいないとされるカイツブリを見つけるのは大変であることを知りつつ、「カイツブリに会いに行こう」を合言葉にして、調査を実施しました。レポーターの皆さんにはご苦労をおかけしましたが、その熱意と努力によってたくさんのデータが集まり、県内の繁殖地について全体像が見えてきました。調査結果から、生息が非常に少ない地域が一部にありましたが、カイツブリは県内各地で繁殖していることが分かりました。また、これまで知られていた、ヨシ帯の大きさと繁殖の関係だけでなく、垂れた樹枝や草がある所そしてヒシが繁る所を、カイツブリが繁殖場所として選択していることが示されました。さらに、人をそれほど怖がらずに、人の近くで繁殖する個体が少なからずいることが分かりました。

舞台裏を明かせば、フィールドレポーターの調査テーマとしてカイツブリを取り上げたいと亀田佳代子学芸員に相談した折、「県のレッドデータブックの改訂に向けた調査の一つとして今年度からカイツブリの繁殖期の様子を調べるので、今年、一緒にやりませんか」という提案を受けて、この調査がスタートしました。滋賀県が実施する生きもの総合調査に私達のデータが活かされて、より詳細な分析が行われると思います。私たちの調査結果に加えてどのような新事実が分かるのか楽しみです。

琵琶湖にたくさんのカイツブリがいて“におのうみ”や“におのはま”と呼ばれる(呼ばれた?)状況を私は知りません。琵琶湖博物館の松田征也学芸員によれば、大津市の琵琶湖文化館周辺では、昭和 50 年頃には既にカイツブリが少なくなっていたそうです。現在、浜大津周辺の湖岸はきれいに整備されていますが、人工護岸の続く岸辺にヨシ帯はなく、カイツブリの隠れ場所となるものもありません。今回の調査で各地を見て回った私の目には、そこにカイツブリが棲めるようには映りませんでした。

調査地で地元の人に話しかけると、ほぼすべての人がカイツブリという鳥を知っていて、どこにいるかまでご存知の方が結構いらっしゃいました。春から夏にかけては鳴き声が聞こえてくるからでしょうが、漁業者や農家の人、釣り人、水辺に住む人など、普段自然に接する機会が多い方たちの目には留まっているということです。人の暮らしの近くにカイツブリが共存している、そんな場所があることを記して、報告を終わりたいと思います。

最後になりましたが、調査の計画段階から報告書作成まで終始、丁寧なご助言ご指導と資料提供をいただきました琵琶湖博物館の亀田佳代子学芸員にお礼を申し上げます。フィールドレポーター担当の大槻達郎学芸員には多岐にわたってお世話になりました。ありがとうございました。

参考文献

- ・滋賀県生きもの総合調査委員会(2016)『滋賀県で大切にすべき野生生物 —滋賀県レッドデータブック 2015 年版』滋賀県自然環境保全課.
- ・須川恒(1996)『日本動物大百科』(第 3 巻鳥類 I)日高敏隆監修, 平凡社.
- ・高野伸二編(1985)『日本の野鳥』山と溪谷社.
- ・「水鳥一斉調査 2017 結果報告」, 『におのうみ』2017 年会報第 48 巻, p.2-8, 日本野鳥の会滋賀

「カイツブリに会いに行こう」調査のご案内

滋賀県の県鳥がカイツブリであることを、皆さんご存知のことと思います。カイツブリといえば水にサッと潜って巧みに魚を捕まえるイメージがある水鳥ですが、最近、フィールドでその姿をご覧になったことがありますか。実は 1980 年代からカイツブリの生息数が減少していて、滋賀県レッドデータブックで 2005 年版以降は、希少種に挙げられています。「琵琶湖の南湖では探してもなかなか見つからない」という嘆きの声が聞かれます。けれども、「子連れの親子を毎年見る」という人もあり、フィールドレポーターの調査テーマとしてカイツブリを取り上げることにしました。春から夏にかけては水辺の散策にちょうどよい季節ですので、カイツブリに会いに行ってみませんか。

滋賀県にはカイツブリの仲間が 5 種記録されています。その中で夏の主役は留鳥であるカイツブリ(種)ですが、稀に、冬鳥であるカンムリカイツブリが夏期も残って繁殖している場合があります。そこで、カンムリカイツブリも併せて調査したいと思います。カンムリカイツブリが見られましたら、カイツブリと同様に、調査票への記入をお願いします。

この調査では、カイツブリ類が子育ての時期にどこにいるのかを調べます。冬期は集団で見られることが多いですが、夏の繁殖期はつがいを形成し、分散して生活するそうです。そのため、琵琶湖周辺だけでなく、内陸のため池や河川の流が緩やかな場所といった、意外なところで見つかることが予想されます。夏の繁殖地がどこにあって、そこにどのくらいの個体数があるか、さらに、どのような環境を子育ての場所を選んでいるかが、調査結果から分かることを期待しています。

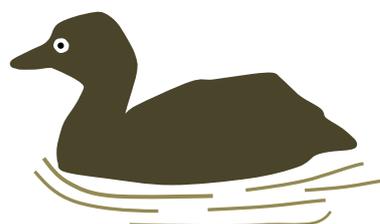
また今回は、皆さんに観察そのものを楽しんでいただくことを目的の一つにしています。カイツブリ類の行動は見ていて飽きないそうですし、両親がかいがいしく子育てするようすも見てみたいものです。産卵・子育て用の浮巢は見られるでしょうか。各人それぞれの新発見があるといいですね。

探す場所は止水的環境で、魚などの水生動物がいて、ヨシ帯があるところです。けれども、探してもカイツブリ類を見つけられない場合があると思います。繁殖地の生息環境を考える上では「いない報告」も重要な情報になりますので、その場合でも、地点の環境などを観察・記録して調査票を送り返してください。よろしくお願いいたします。

なお、調査期間は 4 月～8 月末とします。

☆草が伸びていると地面の凹凸に気づきにくかったり、水辺で濡れていると滑ってしまったりすることがあります。足元には十分気をつけて観察してください。

☆鳥は近づきすぎるとどんどん逃げてしまいます。見つけたらすぐに近寄らず、遠くから観察して、徐々に(静かに)近づいてみてください。



フィールドレポーター 2017 年度第 1 回
「カイツブリに会いに行こう」調査

1. 調査者 _____

2. 調査日 2017 年 月 日

3. 調査地点

住所 _____ 市・町 _____

地点の目印 (例…野洲川の野村橋の下流 300m、樹下神社の南すぐの池)

緯度経度 (わかれば) 北緯 _____ 東経 _____

4. 地点の環境

(1) その場所は

 琵琶湖 内湖 池・沼 ダム湖 河川・水路 その他 _____
(2) ヨシなどの背の高い水草が、岸近くの水面上に生えていますか (そこから見える範囲で) 生えていない 生えている → ヨシ マコモ ガマ ハス その他 _____

その植物帯の大きさは

①	() 帯状に (幅	m × 長さ	m くらい)
		m ×	m くらい が 箇所)

(3) 人の往来などは (複数回答可)

 近くに漁船がいる (通る) 近くにレジャーボートがいる 岸に釣り人がいる 岸は人通りが頻繁 車がよく通る 人の姿はほとんどない その他 _____

5. カイツブリ・カンムリカイツブリがいましたか

(1) 生息の有無 : 見つからなかった ⇒ 設問 6 へ 見つかった ⇒ 次の設問へ(2) 確認方法 : 鳴き声を聞いた 姿を見た

(3) あなたがカイツブリまたはカンムリカイツブリと判断したポイントは? * 資料の見分け方を参考に

(4) 見られた種と羽数

種	カイツブリ	カンムリカイツブリ
羽数	(羽)	(羽)
その内訳	子ども (羽)	子ども (羽)
	大人 (羽)	大人 (羽)

* 親のサイズに比べてはっきりと小さく、頭や胴に白黒の縞模様があるものを子どもとします。

(5) その場所から巣が見えましたか : 見えた 見えなかった

(6)何をしていましたか。生息した種について、観察された主な行動に◎、他に観察された行動に○、その行動が見られなかった場合は×で、行動項目欄すべてに記入してください。

行動	・巣の中にいた	・水面でじっとしていた	・水面を泳いでいた	・水中に潜って(採餌して)いた	・子どもを背中に乗せていた	・子どもに餌を与えていた	・他の鳥を追い払っていた	・飛んでいた	・鳴いていた	その他
カイツブリ										
カンムリカイツブリ										

・潜っていた場合、何秒くらい潜っていましたか？ ()

・鳴いていた場合、それを音(文字)で表すと？

カイツブリ _____ カンムリカイツブリ _____

・どんな様子だったかを詳しく教えてください

[]

6. その観察地点で他の種類の鳥が見られましたか

()見られない

()見られた→ ()カルガモ ()白いサギ[ダイサギ・チュウサギ・コサギ] ()アマサギ
 ()アオサギ ()バン ()オオバン ()カワウ ()オオヨシキリ
 ()カワセミ ()その他 _____

それらの鳥は何をしていましたか

[]

7. カイツブリ類の生息や行動について、あなたの記憶や経験を教えてください

(いつ、どこで見たか、おおよその生息数、どのような状況だったかなど。カイツブリの卵やヒナが、他の動物に食べられそうになったり食べられたりしたのを見たことがある人は、是非お知らせください。)

8. 調査で気づいたこと、苦労したこと、質問したいこと、思い出などをご自由にお書きください。

カイツブリ類について

カイツブリ類は体の後方についている足を 360 度自在に動かして、水中を泳ぎ回り、小さな魚や水生昆虫などを採食する。滋賀県では 5 種が記録されている。基本的にカイツブリは留鳥（1 年中いる鳥）、他の 4 種（カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ）は冬鳥（冬に渡来する鳥）であるが、近年、カンムリカイツブリの一部が夏期もとどまって繁殖している。雌雄同色。夏羽と冬羽では色が異なる。

繁殖期は 4 月～9 月頃で、ヨシなどの抽水植物（根は水底の土壤にあり、茎や葉を水上に伸ばす植物）が茂る水面に水草などで皿形の浮巣を作り、雌雄で抱卵・子育てをする。一つがいが年に 1～2 回の子育てをする。ヒナは孵化後すぐに泳げるが、小さいうちは親が背中に載せたり羽の下に入れたりして、移動する光景が見られる。また、最初の 2～3 か月間は両親から餌をもらう。

調査対象のカイツブリ 2 種の見分け方

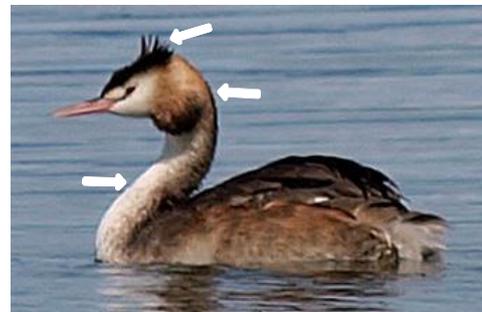
* 写真は夏羽です

カイツブリ



- 全長 25～29 cm でムクドリくらいの大きさ。
- 夏羽は頭と背が黒褐色で、頬から首にかけて鮮やかな赤褐色。くちばしの元に黄白色の斑がある。目の色は黄色い。カンムリカイツブリに比べて小型で、丸っこい形をしている。
- ヒナや幼鳥は、頭や胴に白黒の縞模様がある。
- 潜水時間は 30 秒くらい。
- ケレケレケレと、甲高く特徴的な鳴き声をする。

カンムリカイツブリ



- 全長 46～61 cm でカラスくらいの大きさ。
- 首が長いのが特徴。独特な求愛ダンスをする。
- 夏羽は、黒い冠羽が後ろ側により長くなり、頬から首の上部にかけてオレンジ色の飾り羽が伸びる。首の前側は白い。目の色は赤色。
- ヒナや幼鳥は、黄色っぽい灰色で、黒褐色の縦縞がある。
- カイツブリより長く潜ることができる。
- グァーグァーと、しわがれた声で鳴く。

☆鳥の声は「バードリサーチ鳴き声図鑑 http://www.bird-research.jp/1_shiryo/nakigoe.html」などで聞くことができます。カイツブリ目の中から、聞きたい種名の箇所をクリックするとダウンロードしますので、Windows Media Player で開いて聞いてください。

カイツブリが いそいそと

◇流れの緩やかな水域 ⇒湖沼や池などの止水域、河川の流れが緩やかな所。

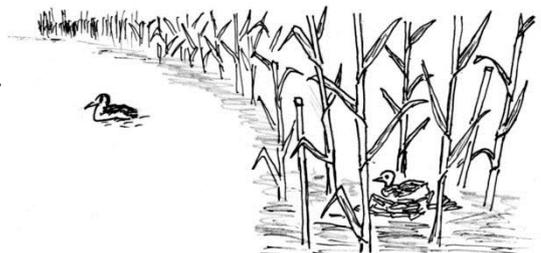
◇産卵のための浮巣を造れる ⇒ヨシなどの抽水植物が水際にあって、水に浸かっている所。

◇親と子が食べていける餌環境

⇒小魚の他、エビ・カニ類、ヤゴなどの水生昆虫、カエルやイモリなどの餌が、子育て期間中に十分捕れそうな所。

◇安心して暮らせる住環境

⇒捕食者や人に子育てを邪魔されにくい所。



カイツブリと間違いやすい鳥 (夏期に、全体が黒っぽくて潜る鳥)



オオバン

潜るようすがカイツブリによく似るため、最も間違いやすい。額とくちばしが白い。全長 39 cm。カイツブリに比べるとむっくりした感じで、潜る瞬間の動作もやや鈍い。



バン

全長 32 cm。額からくちばしの基部が赤色、くちばしの先は黄色い。体側によく目立つ白斑がある。ヨシ原の水面付近に巣を造る。水中に潜ることは少ない。



カワウ

全長 80~90 cm。長いくちばしの先はかぎ状に曲がる。水面に浮いている時は、体はかなり沈む。飛びながら魚を探す。木や杭にとまっている姿がよく見られる。

その他、水辺で見られる代表的な鳥



脚の指が黄色い

コサギ
(留鳥 全長約 61 cm)



チュウサギ

(夏鳥 全長 63~72 cm)

他のシラサギに比べて、くちばしが短い

この写真は冬羽。夏はくちばしが黒くなる。くちばしの元から目の下を通るラインが、目よりも後方まで伸びる。



ダイサギ

(留鳥 全長 84~94 cm)

オレンジ色の飾り羽が頭~首と、背中にも。



アマサギ

(夏鳥 全長 50~60 cm)



アオサギ

(留鳥 全長 90~98 cm)

・くちばしの先が黄色い。
・くちばし元~目~後頭部にかけての隈取りが特徴。



カルガモ

(留鳥 全長 54~61 cm)

ヨシ原で やかましく、「ギョギョシ」と鳴く



オオヨシキリ

(夏鳥 約 19 cm)

☆サギ類は夏に、長く美しい飾りが胸や背中に伸びる。また、首をZや“2”のような形に縮めて飛ぶので、サギ類であることがすぐにわかる。

ヨシとマコモの見分け

ヨシは高さが 1~3m で水中や陸上に生え、マコモは同 1~2m で水中に生える。芦谷美奈子学芸員は「マコモは叢生(そうせい)し、ヨシよりも葉を密につけるので、“葉っぱ葉っぱしている”」という。

出所

- ・鳥のサイズ(全長)は「日本動物大百科」(1996) 平凡社による
- ・写真は琵琶湖博物館所蔵・松田征也

参考文献

- ・「滋賀の水鳥・図解ハンドブック」(1994) 口分田政博監修 滋賀県小中学校教育研究会理科部会編 新学社
- ・「滋賀県で大切にすべき野生生物 —滋賀県レッドデータブック 2015 年版—」(2016) 滋賀県生きもの総合調査委員会編集 滋賀県自然環境保全課発行
- ・「日本動物大百科 鳥類 I、II」(1996) 日高敏隆監修 樋口広芳/森岡弘之/山岸哲編集 平凡社
- ・「日本の野鳥」(1985) 高野伸二編 浜口哲一/森岡照明/叶内拓哉/蒲谷鶴彦著 山と溪谷社